

一步踏み出しますか！

公益財団ふじのくに未来財団

代表理事 伊藤育子

1) 経歴

- ・場面緘黙児→米沢興譲館
- ・小中高大の教員 海外の学校勤務 市教委指導主事 県教委課長
県総合教育センター副所長
文部省（中央教育審議会委員）
- ・議員 美術家

2) 静岡県議会議員の活動

- ・県教育行政（小学校専門教科制 通学合宿 スクールサポーター 青年の翼）
- ・地域福祉の充実（地域大家族 退職者の社会貢献活動の場づくり NPO 支援）
- ・静岡空港（富士山静岡空港 中国 台湾 韓国の空路の開拓 韓国・台湾事務所）

3) 日本の課題・地域の課題

- ・核家族化がもたらしたもの→青少年問題と高齢社会の問題
- ・「世のため 人のため」は死語か
- ・「NPO 未来クリエート21」の立ち上げ
- ・「公益財団ふじのくに未来財団」の仕事
- ・「ありがとう」の力

4) 人間のタイプ

- ・洋服は変えられる
- ・「ぶりっこ」
- ・T字型人間とI字型人間
- ・リフレーミング
- ・「行動する」ことの意味

「丁字型人間は今や通用しない。丁字型でなければだめだ」とはよく聞く。丁字型人間とは縦一本の専門分野のみならず、ポータレス時代に堪えるように他の分野にも広がりを持っている人間のタイプのことらしい。

私はその昔、れっきとした登校



子 育
伊 藤

拒否児であった。幼稚園時代から人見知りの激しい「内弁慶の外味贈」の子供で、母も随分苦労したよつだ。小学校四年生の時にはついに、学校に行かない日が続くようになつてしまった。教室の片隅で借りてきた猫のよつにしてすいていた四年生までの日々の、空

気の痛さが今でも皮膚に鮮やかによみがえる。

ところが五年生になる春休み。近所の友達が息つききって駆け込んできた。隣の組の担任の上杉先生が、スキーが得意な子供たちを滑川スキー場に練習に連れて行ってくれるという。先生が「イッちゃんも連れて来い」と言つたとき、興奮して誘いにくれたのだ。

丁字型人間

どなり声さえも私を有頂天にさせた。雪の反射で顔がまぶたにやけ、ぶち猫のよつだと笑い合った光景も、光や風のおいや色も、上杉先生の姿とからみあって心のひだに曇り込まれている。それからというものは上杉先生に会うのが楽しみで、いそいそと学校に行ったものだ。先生との別れの時は声をあげて泣いた。

た。上杉先生といえは、大回転の選手として有名な人で、その華麗なるフォームは子供たちのあこがれであり誇りでもあった。スキーには自信のあった私は「あの上杉先生」が誘つてくれたのがこの上なくうれしくて、「一も二もなくその誘いに乗った。当日の楽しさは言うまでもない。先生の「だめだめ」という

いってみれば私は、上杉先生という

丁字型人間の横の棒線にかろつじてひつかかった。I字型人間はもちろん素晴らしいと思つ。だが、他と世界を共有するための、横に延びる手は何本あつてもいい。それも長いほどいい。できれば樹木型ならもつといい。こんなふうに思つのも、幼い日の記憶の故かもしれない。

(洋画家 島田市)

養員のへり下りたはけてもの足りず

私の好きな句の一つである。作者は島田市教育長、村田武男氏。「もの足りず」がどうも物足りないのだと自作を語れば、吹奏楽にうつろをぬかす私の隣席が、これまた音楽をものする者の目で見た



子青 藤 伊

俳句論を評論家取りで述べ立てる。果ては桑原の「第二芸術論」まで飛び出し、ますます活気を呈する。これで各々が作句する気になれば最高だ。

この俳句談義に纏(まつ)わる人間関係は、いわゆる縦社会における上下の関係では全くない。自分の意思でいくらでも扱ったり、

質を高めたりしていくことのできる「横出世」の世界だ。縦社会における出世は所詮(しょせん)、他人が評価し、他人が決めてくれることである。人はこの縦社会の中で、満たされない欲求をかこちながら、悪戦苦闘の何十年かを費やし、エンドレスのワーカホリック症に罹っていく。欲求や欲望自体も、それと同時に退化していく

横 出 世

＝

＝

……

この愉快な「横出世」のチャンスを長い間

呼び、話が話を呼ぶ。

中で突然、定年というピリオドを打たれてしまう。挙げ句の果てが「濡れ落葉」では哀しいを通り越して哀れでさえある。

そこにいくと「横出世」は断然強い。いつでも、だれでも、どこでもできる肩書き抜きの世界だ。

人の話しにのること、人の集まる場所にさえ出掛ければ、だ。一週間前の日曜日「青葉会」から、富嶽ヒエンナーレ大賞受賞の

お祝いにと、鮮やかな赤のガーベラの花束をいただいた。同窓会とか同級会とか過去を引きずるようなものは、一切興味を持たない私であったが、この日は大変身をしてしまった。同じ仙台の大学で青春の一時を過ごした共通項を唯一条件とする「青葉会」だが、これは「過去」どころではない「現在そのもの」であった。人が人を

逃がしてきたのかと思うと、悔しい限りだ。

仕事の切れ目は縁の切れ目という。「肩書きで勝負」の縦社会に確と首を突っ込みながら「肩書きなしの横出世」も、あだや疎かには出来ない。と書いている処に、

絵で知合った市民病院の戸塚先生から、私の本職である教育に関する貴重な資料が送られてきた。

(洋画家―島田市)

先日、島田市民病院の松田先生から面白いお話を伺った。長年思い込んでいた小学四年時の私の「登校拒否」はむしろ「怠学」といった方がいい。むしろ「怠学」というのだそうだ。「登校拒否」の場合は本人は行きたいのだけれど、いざとなると行けないという



子 育 藤 伊

葛藤(かっとう)があるのだという。私の場合、葛藤など全くなかった。ある日突然、身辺の私物をかき集め帰宅した。もちろん、わけがあつたのだ。私が学校にいられる条件が整わない限り行かないと決めてしまった。勉強なら家でもできると思つたし、友達なら学校が終われば今と違つて遊ぶ

ところはいくらでもあつたから困りはしない。要は学校に行かなければならないことなど当時の私には何もなかった。学校とは先生の魅力以外にはなかったのだから。「登校拒否」に伴つ葛藤状態といふのなら絵にかかわるこの十余年の方に思い当たる節が余程ある。登校拒否ならぬ「入室拒否」である。画室に入るか入らないか、

入室拒否

ほとんど毎晩葛藤状態だ。帰宅するまでは勢いがいいのだが夕食後から九時ころになると、画室に入らなくてもよい口実をいろいろ考へ始める。

それはさうだ。私の場合「絵を描かなければいけない」とのたまつ絵の仲間たちがうらやましいばかりだ。自慢ではないが、小、中学校九年間を通して絵で褒められたことなどない。いや、二度あ

つた。一度目は小学校でおひな様が大きくなっていいと褒められた。二度目は中学校。友達の前顔絵で鼻の穴がそっくりだと褒められ、それでもうれしかった。こんなふうだったから今でも絵を描くことに抵抗があるし、葛藤だつてあるわけだ。

再び松田先生の言によれば、登校拒否に陥つた子供に対して必要

なのは、周囲の人々による「蚤(のみ)のハードル」的課題

の与え方と「いい意味での特別扱い」ださうだ。私の十余年も同様である。私はそれら二条件を周囲に助けられながら、自分で自分に与えてきた。

私たちは「ごく普通の人間」であることを嘆くことはない。他人とのかかわりの中で人は希望を与えられ、また力を拓(ひろ)いていく存在なのだから。

(洋画家＝島田市)

その場で出来上がってきた自分の写真をスーシーはじっと見つめた。突然それを伏せてもつ一回撮るのだと真剣な目つきで言い出した。街のカメラ屋に公用の顔写真を撮りに連れて行った時の話だ。あらかじめ私もその写真を眺めてみる。なるほど、気がいらぬわけ



子 育 藤 伊

だ。今まで見てきた彼女の写真とは少々異なる。率直にいえば、ほぼ美物通りなのだ。

まあ、その次の写真を撮るまでの数分がなかなかの緊張だ。手鏡を覗(にら)みつけ、パッと笑顔をつくる。それを何回か繰り返し、その後、再びカメラの前に立つ。二回目までできた写真は、みごと

に美しい笑顔だった。彼女はニンマリとしてO・Kと言った。

なるほど、そうだった。この笑顔の訓練は小学校の時から行われる。いや、もっと早くからかもしれないが、私の知る限りでは、私が招聘(へい)教師として勤めていたレイク小学校のスクールピクチャーだった。年度初めの九月にすべての子供たちの顔写真を一人

笑顔の訓練

＝

ずつ撮るのだが、二百人そこそこの子供に三人の女性カメラマンが一日がかりだ。子供がビッグスマイルをつくるために先生も手鏡をもって走り回る。よくしたもので

一年生に半日かかれば、二年生から六年生までに半日だ。校長のジーンは「最高の笑顔こそ、その子の本当の顔だ」という。そしてこうも言った。「まず笑顔をつくる。そうすれば、その箱の中に、

喜びがおのずと入ってくる。だからまず、笑顔をつくる訓練からだ」と。そうかもしれないと、私はいたく感じ入ったものだ。「笑う門には」と日本の諺(ことわざ)にも言う。古今東西、これは人間の

真実なのだ。国立京都病院の先生の上鬱(うつ)病やストレスに効果的だ、などという話を伺えば、

これは真剣に考える値打ちありというものだ。顔見知りとい

えども他人に笑顔を見せるなどは、むしろステータスに傷がつく。とでも言わんばかりの方々にも、ぜひお勧めしたい。

笑顔を導く喜びをたくさん貯めこんで老いを迎えることのできる人は幸せだ。それは多分、小さな喜びをどのくらい見つけられるかにかかっている。ジーンは「それも訓練よ」とにっこりして言うのだらう。

(洋画家 島田市)